

『源氏物語』の教育学的考察 その四

—— 柏木・夕霧に見られる王朝男君の心の様相 ——

尾田綾子

An Educational Study of "The Tale of Genji" IV

Ayako Oda

はじめに

『源氏物語』の作者紫式部が、透徹した目と心をもって現実の人間の心の様相を的確に把握し、それを物語の中で具象的な人物像に託し、実に生き生きとした言葉で表現しているのを、物語読者は誰しも認めることであろう。特に、物語第二部、三四帖から四一帖までの「若菜上」「若菜下」「柏木」「横笛」「鈴虫」「夕霧」「御法」「幻」の巻々は、第一部の客観的に事件を物語る文章表現ではなく、登場人物が各々心の内面——自己意識——を凝視し、重い言葉で思ったり語ったりするのを繋げてゆく文章表現になっている。独白的な思いにしろ、相手に語る会話にしろ、心の内部を言葉で掬い出せば、随分と多言になる。第二部では文庫本数頁にわたる思いが随所に述べられていることに気がつく。

本紀要15号の物語構造論で説いたように、人が己れの「心」の内
部を窺く時、そこに何を見出すであろうか。何につけても後悔の忸
怩たる思いを持たぬ者はいないであろうし、又、将来に対して如何
しようかと思悩む時、それ即ち苦の境地である。私達は他者と時
間空間を同じくして共存する時には、何やら互いに了解・融合の気
分に左右されて、深く自己を省みる余裕も無いが、ひとり真摯に自
分と向き合えば、仏教で「無明」という語で論じているあの数々
の煩惱に翻弄され困惑苦悩の思いに捕らわれている我が心を識るの
である。

『源氏物語』を今まで王朝の姫君教育の為の物語書とする仮定か
ら考察してきたが、物語第二部ではこの苦悩の姿を姫君の目の前に
描き出すことで——言い換えれば、人間の苦悩を知的に識ることで、
現実の苦からの解放、苦を乗り越える力を養い得ると紫式部は意図

したものと考えられる。そして、「教育」という見地からして、人間社会の営みを「典型」「常識」という一般的な枠組の中で捉え、広く片寄らない識見を育てる必要があったとも考えられるのである。苦悩の世界を、1 人生における絆 2 人間存在の孤独 3 自己実現の阻止 4 夢想の人の躓き 5 常識の人の限界 というような五型をもって抽象し、これを具体的に現実で見られるような人間生活を通して語り盡くしているのが『源氏物語』の第二部なのである。

物語の筋を追えば、父親像として朱雀院と明石の入道を対照させ、男君像としては柏木と夕霧、新婚の姫君像としては女三官と明石姫君、女君としては女二宮と紫の上、等々 人物を対照的典型的に語ることで同様な苦の限界状況に立たされた者の「苦」への対処の差違を認識できるような配慮されている。

この小論では、苦の様相の中、柏木と夕霧という王朝世界の恵まれた上流貴族出の若者の内面に秘された苦悩を「夢想の人の躓き」「常識の人の限界」として考察したい。何故なら、ここに描かれた若者達の心理は、現代の豊かな日本の若者の心理に不思議なほど重なり合っているのである。千年の時を隔ててなお同質の苦悩を心に抱いている我々日本人の精神の在り方に、改めて反省の必要を迫られる思いを深めたからである。

一 柏木の君 —— 人柄と人生 ——

柏木は時の太政大臣の嫡男である。次男の君が早々と物語に登場して「賢木」卷^{〔注1〕}で高砂を謡って光源氏に賞でられたり「滌標」卷^{〔注2〕}で妹の姫君が冷泉帝の女御になられた折「かの高砂歌ひし君

も、かうぶりせさせて、いと思ふさまなり」という一文が付され、大臣家では大勢の子供達がつぎつぎに育つてにぎやかだと語られているのに、なぜか長男の柏木については一言も触れていない。彼の姿が漸く物語に現れるのは「胡蝶」卷^{〔注3〕}からである。この時、六条院に引取られた玉鬘の姫君を異母姉とは知らず、他の貴公子と競って懸想文を贈ったのであるが、それは読者に極めて鮮やかな印象を与える語り口である。

思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば

の恋歌を 唐の縹色^{〔注4〕}の薄紙で薫香のなつかしく染み匂っているのを細く結んだものに しゃれた筆跡で書いてあったので、源氏の君の目に止まり「見どころある文書きかな」と好意的に認められたというのである。《こんなにお慕いしているのをあなたは御存知ないでしょう。湧き返って岩間から溢れるほどの水に色が無いように、湧き返える熱い思いも外からは見えないでしょうから》という意味の歌で、清冽な湧き水のイメージに二十代の若者のすがすがしい慕情が控え目に重ねられている好い贈歌である。現代の青年が歌ったとしてもおかしくないほど新鮮な着想である。この歌から女房達に「岩漏る中將」と呼ばれるようになり人目を惹きはじめるのである。しかし、やがて玉鬘は異母姉と分かり、穏やかな落着いた性質の柏木は高ぶる気持を鎮めて、好ましい青年貴族の姿を見せるのである。次に物語りで語られるのは「若菜上」卷^{〔注4〕}で、朱雀院の愛姫女三宮の婿選びの時である。ここでは柏木の性格が非常にはつきりと描き出されている。柏木衛門督は妻としては最高の女性を願望し、

その為に、ずっと独身を通して来たという。常に落着いていて自信に満ちている態度は他の若者と異っており、学才も申し分なく……という具合である。皇女との結婚は父親の太政大臣も望むところであるが、親子の思い方には違いがあった。親の方は太政大臣という権門の立場で、皇女を迎えることは家の名誉であり、皇室との関係を深めることで更に勢力を強めることに期待をかけている。息子の柏木は、良いものは良い、何でも最高のものが欲しいという主観的心情である。ただ、その良さの判断は、自分の耳目で確かめるというのではなく、世間の評判、情報に従い、しかも、浪漫的心情で思いつくタイプであった。女三宮を朱雀院が大切にしている姫君というだけで、宮中に係わりのある親族に頼み込んで執り成しを願っている。勿論、当時の風習では結婚前に女性を見ることなど不可能であったが——私達読者は、光源氏の若き日末摘花に出逢った折の失敗譚と比べて、あの時はまだ相手を知る手懸りとして琴の音を聞いたことを思い出す——柏木の心は、ただひたすら女三宮を夢想し憧れているのである。婿選びの話が、女三宮の未成熟な状態を案ずる朱雀院の懸念から親代わりのような形で六条院（光源氏）に決まった時、柏木が先ず思ったことは、「源氏君が、もしかして前々からの御本懐の出家などなさったら、その後は私がお引受け申し上げよう」ということであり、又「紫の上の御寵愛には負けていらっしやる」という世評を真に受けて、「自分であったら姫君にそのよくな物思いはおさせしない」という、あまりにも一方的な思い込みであった。こうした心の持主にあつては、すべて物事を自分の理想通りに思い込み、相手の実相に出逢っても見ようとしなない。春三月、六条院にたまたま若い貴公子が集ったので蹴鞠に興じることになり、

その最中、大きな猫に追掛けられた小猫が女三宮の御前の御簾から飛び出てきて首の綱をものにひっかけ弾みに御簾がまくれて、夕影ではつきりは見えなかつたけれど、几帳の横に桂姿の姫宮の立つていらつしやるのを目にした時、一緒に居た親友の夕霧は、高貴な女性が端近に立ち上っているなんて不作法な……と見たのであるが、平素からの憧憬が叶った思いの柏木には、もうすべてが素晴らしく唯々心惹かれる思いが強まるばかりである。原文には「よろづの罪をもをさをさたどられず」とあるように、誰が見ても欠点が色々あるのにそこへ目が届かないのは、自分の心の真実しか眼中に無いということであろう。彼の思惟は主観的観念論で思い込みの世界に疑いもなく安住しているようである。

しかし、すぐその後で六条院光源氏の立派な態度・姿に圧倒されて、この様な方を見慣れている女三宮が未熟な自分に心を向けて下さる筈は無いと絶望的になり胸の塞がる思いをするのである。兎角柏木は心の中で独り相撲をとるばかりであったが、挙げ句の果て、何とかしてこの深くお慕い申し上げているという事だけでも知って頂きたいと、胸の痛む程思い悩み、知り合いの女房の許に手紙を托した。その文面に、

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ
 (古今集在原業平)

へほのかではあるがあなたを見たので恋しくて物思いに耽っているの歌から引歌して「あやなく今日はながめ暮らしはべる」と書いたので、受け取った女三宮はあの時見られたとはっとし、手紙の主をどうこう思う前に、日頃から人に見られるような端たない事を

せぬよう注意されていたのにと源氏の君がどのようにお叱りなさるかと唯その事ばかり恐れる有様であった。この様な幼稚な方を相手に柏木の無鉄砲な行為が破綻を招かない筈はない。しかも相手の女三宮は柏木の一途な慕情に応じ得るほど成熟されていないのだから悲劇と言うより無理と言うべきであろう。

やがて四年後、御代が替わり、女三宮の兄君が帝位に就かれた。柏木衛門督は新帝の琴の師として親しく仕えていたこともあって、世間から「時の人」と呼ばれる。身の覚えが勝るにつけても益々思うことの叶わぬ愁いに思い詫びて、女三宮の姉君の女二宮の婿君となる。と言つても女二宮の母君は下臈の更衣であったので面白くない、結婚生活は世間体を保つだけの形通りのもので、心の中は益々慰め難く女三宮への思慕を募らせていくのである。

女二宮は「人柄もなべての人に思ひなずらふれば、けはひこよくおはすれど」^(注6)と皇女としてさすがに優雅でいらつしやつたのに、思い込みの想念に捕らわれている柏木には目の前の存在そのものの良さが見えてこない。しかも柏木の想念は、朱雀院最後の皇女であり、藤壺中宮の妹君の藤壺女御を母とする貴種であり、現在は六条院の正室であるという重々しい経歴を持たれる女三宮こそ最高の女性であるとの思いを募らせるばかりで、女三宮その人の現実の姿を知ろうとはしていない。社会的通念を判断基準にしながら現実を確かめようともせず、一途に情念を燃やしているのである。

彼は情念を押さえ難く、又も女三宮に仕えている女房の小侍従に訴えて女三宮に近づこうとした。

まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば、気近く、なか

なか思ひ乱ることもまさるべきことまでは、思ひも寄らず、ただ、いとほのかに御衣ぎぬのつまばかりを見たてまつりし春の夕の、飽あかず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまを、すこし気近くて見たてまつり、思ふことをも聞こえ知らせては、一行ひとみちの御返りなどもや見せたまふ、あはれとやおぼし知る、とぞ思ひける。^(注7)

と思ひながら小侍従の手引きで、四月賀茂の祭の御禊の日を明日に控えて人々が見物に出ようと準備にざわめいている暇に、人少々の女三宮の御帳の端に坐つたのである。

柏木は女三宮にお逢いしてどうしようとするのか。無理を無理押しして扱その後の事は考えていない。自分の存在を相手に分かつて貰いたい、唯それ丈で自分は満足できると思つていようであるが、相手にとつてそうした出逢いがどれ程迷惑なものか分かつていない。己れの情念を押さえ難くやみくもの行為に移ってしまったというのであろう。結果を見据えて懸命に生きる姿は美しいが、やみくもの行為を同じに評価してよいものだろうか。在原業平の高子への想い、光源氏の藤壺中宮への想い、日本精神の系譜に見られるこの情念の姿は賛美されることはあつても貶されることはないようであるが。

柏木は女三宮の足元で思の丈を長々と語りはじめた。宮は無心に休んでいられたところ、身近に人の気配があるので源氏君かと思つて見ると「あらぬ人」であつた。それが聞いたことも無いような事をあれこれ畏まつて語るではないか。呆れて恐ろしくわなわな身体は震え冷汗も流れて呆然自失の体でいらつしやる。柏木の話は長い。宮は事情が少しずつ分かつてきたが不快な恐ろしいことなので

一言の返事もなさらぬ。柏木は焦れて「あはれ(かわいそう)とだけでも言つて下さい」と懇願しているうちに自制心を失つた。

もともと柏木の想念の中で、皇女は気品高く毅然としている筈であつた。だから思いの片端を伝えてすぐ引下がろうと思つていた。それが、目の前になつかしげな可憐な感じでただもの柔らかに上品にしていらつしやるので、どこでもいいから此の方をお連れし人目につかぬ所へお隠しして自分も行方をくらましてしまいたいと我を忘れてしまつたのだ。

此の夜、とうとう宮は一言も物が言えなかつた。柏木は一言でよいかから好意を示す一言を得たく責め求めたがこれはあまりにも自己中心的な願望である。やがて時と共に我ながらとんでもない過ちを犯したという思いが募り面を上げて生きてゆけないと身の竦む思いに心乱れ、人なかに出かけることもできなくなつた。

柏木は女三宮にお逢いする迄は、逢う事だけを願つて苦しんでいた。お逢いすれば心は晴れると信じていた。だが逢つた事で別の苦しみが更に加わつた。もつと度々お逢いして理解してもらいたい——六条院に人目を忍んで行く事は困難である。それにしても女三宮は六条院の正妻である。源氏の君に咎められたらどうなるのか。

にもかかわらず柏木は侍従を通して身の程をわきまえない手紙を女三宮の許に送つてしまつた。宮は見たくもなかつたのに侍従に催促されて広げた時、女房が入つて来たり、源氏の君まで姿を現したので、どきどきして座ぶとんの下に差込んで隠してしまつたと言う。そしてその儘うっかり忘れてしまつた。翌朝、見失つた扇を探していた源氏の目に止まり何気なく拾われてしまつたのである。源氏の手にした浅緑の色紙に見覚えのある侍従と女三宮は息の止まる思い

である。源氏は心の内で激怒した。しかしどうも本人達が心を合わせたのではないようだし、柏木のような若者に妻を奪われた噂が流れたら体裁も悪く不愉快だと思ひ困じているうちに、故桐壺院も、この様に内心は何もかも知つていて知らぬふりをなさつたのであるうかと、若き日の藤壺との過ちを思い出されて、心を狂わす恋の山路は非難できないというお氣持になられたのである。

しかし、小侍従から手紙が源氏の手へ落ちた一件を聞かされた柏木は心底恐れ戦いた。長い間、お側近く親しく参り馴れて、他の人より細々と目をかけて頂いた源氏の君の御氣持が有難く、身に沁みて思ひ出されると、今からは不届き者めと嫌われて、どうしたらよいものか生きた心地がなくなつた。顔を合わせることもできないし、素知らぬ顔を押し通すこともできず、不安に苛まれているうちに身体の具合も悪くなつて宮中に参内することもできなくなつた。

柏木の六条院への御無沙汰が人々の不審を買う頃、朱雀院の五十賀の祝宴の試楽を行うということで源氏の君からお召しがあつた。父大臣にも唆されて柏木は参上する。音楽に堪能な柏木はその務めを果すが、試楽の後の酒の席上、大勢の人々の中で畏まつて居る柏木を名指して

「過ぐる齡に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほゑまるる、いと心はづかしや。さりとも今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」(注)

と声を掛けられたのである。若者に若い妻を犯されたという嫉妬心

が籠められていたとしても源氏の言葉は《年をとるとつい酒を飲んで涙もろくなるものだ。若い衛門督がこちらを見てにやにや笑っているのが恥かしい。だがそれも暫くの間で、

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡やともに帰ると

と歌った古今集歌のように、誰もがいつか年をとり老がやってくることだ》と、むしろ我が老を自嘲するものであろう。それを柏木は自責の念から《今、いい気であるお前もやがて必ず年寄りになるぞ》と、威嚇的に怒りをぶつけられたと思つたのであろうか。宴席途中で気分が悪く堪えられなくなり退席し、悪酔したとも思えぬのに、そのままひどく思つてしまう。心の中で「我ながらそんなに怖気づく程の意気地なしとは思えないのに、何とも腑甲斐ない」と思いつながらもう二度と立ち上がれぬ思いに捕らわれるのである。急に重態に陥るといふ病状ではないが、生きる気力を失い、食事も喉を通らぬ有様で、家族の者達が心配し泣き騒ぐ中で日に日に弱つて行つた。

二「柏木」巻の主題 —— 夢想の人の蹟き ——

『源氏物語』は五十四帖に分冊されているが、昔から内容を年表に整理して年立とし、光源氏の一代記のように読み習わしてきた。しかし、五十四帖が必ずしも時間の順序に従つて重ねられていないこと、分量も帖によつて長短様々であることなどを勘案すると、一帖ごとの短編物語として各巻にそれぞれ固有の意味が纏められているものとして読み続けた方が作者の意向に適うように思われる。特に物語の第二部は、事柄としては「女三宮の六条院降嫁とその余波」ということでそこに係わり合つた人々の内心を語つているのである

から、この「柏木」巻も柏木衛門督の心情を通して作者が聴手に伝えたかったものが何であるか考える必要がある。

「柏木」巻はのつけから不安に苛まれた柏木のモノログである。

大臣、北の方、おぼし嘆くさまを見たてまつるに、しひてかけ離れなむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、また、^①あながちにこの世に離れがたく、惜しみとどめまほしき身かは、^②いはけなかりしほどより、思ふ心異にて、何ごとをも、人に今一際まさらむと、公私のことに触れて、なのめならず思ひ上りしかど、^③その心かなひがたかりけりと、一つ二つの節ごとに、身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深く進みにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重きほだしなるべくおぼえしかば、とざまかうざまにまぎらはしつづ過ぐしつるを、つひになほ世に立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの、一方ならず身に添ひにたるは、われよりほかに誰かはつらき、^④心づからもてそこなひつるにこそあめれと思ふに、恨むべき人もなし、神仏をもかこたむかたなきは、これ皆さるべきにこそはあらめ、誰も千年の松ならぬ世は、つひにとまるべきにもあらぬを、かく人にもすこしうちしのばれぬべきほどにて、なげのあはれをもかけたまふ人あらむをこそは、^⑤一つ思ひに燃えぬるしにはせめ、せめてながらへば、おのづからあるまじき名をも立ち、われも人もやすからぬ乱れ出で来るやうもあらむよりは、なめしと心置いたまふあたりにも、さりともおぼしゆるいてむかし、^⑥よろづのこと、今は

のとちめには、皆消えぬべきわざなり、また異ざまのあやまちしなれば、年ごろものをりをふしごとには^③まつはしならひたまひにしかたのあはれも出で来なむ、など、つれづれに思ひ続くるも、うち返しいとあぢきなし。^④

太政大臣の嫡男で、若くして中納言（従三位相当）となり右衛門府の長官に就いている青年、帝の女二宮を妻とし人望も厚く、将来必ず国家の柱石となる筈と囑望されている青年の心の内部が、石のような思いに満たされているとは、彼をよく知る人々ですら考えられなかったに違いない。まして何時の時代でも、恵まれた若者に対する世間の評価は外見の輝かしさへの羨望以外の何ものでもない。本来なら「生」を楽しく享受し得る立場にあった柏木なのにこれではあまりにも逞しさに欠けるではないか。いや、彼自身^⑤「小さい時から人とは違って他者以上に勝れたものになろうと努力してきた」と思っている、その努力は逞しいものであつたらう。そうした努力・錬えられた能力・体面を保つ精神力などは尋常のもの以上と思われる。唯、そうしたものの心底にある「生きる力」の支えになるものを持っていなかったと言ふべきか。身心共に衰弱している時の内省であつたとはいへ、^⑥「生きようと死のうとつまらない我が身にとつてどうということもない」^⑦「今迄だつて何か思い通りにゆかない折、世の中がつまらなくなり出家したいと思つた」^⑧「此の度の躓きは自分の料簡の間違いだから神仏に頼れない」^⑨「女三宮を本気で恋したことだけを生きた証としよう」^⑩「生き長らえて面倒に耐えるより、自ら死ねば一切帳消しになる筈だ」^⑪「そうしたら源氏の君も少しは私を可愛想と思つてくれるかも」という論理

を辿る限りでは、気弱に「死ねば世間が宥してくれる」という、あの伝統的な日本人の心情以外の何ものも見出せない。この後で女三宮の男子出産、続いて朱雀法皇の手による剃髪出家の知らせを瀕死の病床で聞いた柏木は、全く生きる氣力を失い、後に遺す正妻女二宮のことを周囲の人々に頼みながら、遂に泡の消え入るような有様で亡くなってしまった。物語は柏木の死後世間の人々が若くして散った才能を惜しむと共に人柄が情愛の深かったことに胸を痛めたことを付け加え、「あはれ衛門督といふ言種、何ごとにつけても言はぬ人なし」という印象的な言葉で「柏木」の巻末を締め括っている。そこで、『源氏物語』の主題を「ものあはれ」と了解した本居宣長のように「此物語をよみて、此柏木君の事を、あはれと思はぬは、心もなき人ぞかし」^⑫と滅びゆくものへの哀悼こそ作者の願いと受け取る研究者も数多く、「一途の情念に燃え尽きた純粋な生、世俗の秩序・権威に対して死とひきかえに挑戦したみごとな生」^⑬とまで賛美する者もいる。

しかし、作者の意図はそうであつたとは思えない。次代を生きる人間の育成の為の「物語」、つまり「教育」の見地に立つと、被教育者を教育者の情念の世界に導くことは主体性を育てることにならず、将来、自主的に判断できる心を培うには、できる限りありの儘の現実の様相を——外側からも（事件）内側からも（心情）——客観的に伝える必要がある。人間の確かな姿を物語を通して眼前し凝視することで自ずからその美点も欠点も見えてくるであらうし、やがて人間や歴史に対する見方が深まり、人生選択に誤つことも避けられる筈である。こうした思考を柴式部は愛読していた司馬遷の「史記」から学んだことであらう。このように考えると「お気の毒な衛

門督よ」と涙するだけでは済まされなくなる。更に、光源氏への執り成しを親友夕霧に托した時の柏木の遺言の言葉を検討してみよう。

……^④六条の院にいささかなることの違ひめありて、月ごろ、

^⑤心のうちにかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の樂所のこころみの日参りて、御けしきを賜はりしに、^⑥なほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、^⑦あぢきなう思うたまへしに、心の騒ぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ。人数にはおほし入れざりけめど、^⑧いはけなうはべし時より、深く頼み申す心のはべりしを、^⑨いかなる讒言などのありけるにかと、これなむ、この世の愁へにて残りはべるべければ、論なうかの後の世のさまたげにもやと思うたまふるを、ことのついでではべらば、御耳とどめて、^⑩よろしうあきらめ申させたまへ。亡からむうしろにも、この^⑪勘事許されたらむなむ、御徳にはべるべき。^⑫……このことは、さらに御心より漏らしたまふまじ。^⑬

柏木は何が言いたかったのか。親友として信頼を置く夕霧に対しても言葉を省いているので、夕霧は心中に思い当る節があったけれどもなお不可解であった。当時の貴族の嗜みとして婉曲な言語表現に頼らざるを得ないにしても、右の文では六条院のお咎めを許してもらって下さいという事しかわからない。柏木は何をしたと気に病んでいるのであろうか。

^⑭「六条院との間でちょっとした行き違があつて」という表現を見る限りでは、柏木は女三宮との情事を愧死をもって償わねばならぬほどの悪事を犯したとは思っていないようである。勿論、源氏の君の怒りは予想された。そこで^⑮「申し訳なく思い」困じて弱っていたところ、お呼びがあつたので参上したら、^⑯「未だ不興が解けない様子」を拝して^⑰「もうどうにもならないと思えて」、うろたえて病が重くなつたと述べている。事の全貌を知らぬ夕霧には何のこともか理解に苦しむところであろうが、柏木は正直に自分の心を述べている。召された時点で源氏の君に許されたと思つて参上したら、君の目差しは許していないものであつた。そこから死に至る絶望的苦境状態になつたと語つていのである。柏木が許される筈と思ひ込んだ理由を詮索すると^⑱「幼少の時から源氏の君を頼りきつていた」間柄であるからと甘えの気持が強かつた事と、それが許されないのは^⑲「讒言（告げ口）」があつたとしか思えないという事になる。誰の如何なる讒言によつて自分の人生が思い通りに行かなくなつたのが長恨となり往生の障害にもなりそうだと言つていのであるから、自分の行為を気に病んだのではなく、相手が誤解して怒を解いてくれないのが意気阻喪の元であり自裁の原因であると主張していることになる。

「讒言」について高橋和夫氏の分析のように……その前句「いはけなう」に続くを見ると、女三の宮降嫁の計画の折、本来なら自分が承つて当然なのに、誰かが、あの若者はだめです、と中傷して、自分は外された。そして紫の上がいるのに源氏が仕方なく貰つた。だから源氏は宮を粗略にするのは当然だし、その事情を源氏がお判りなら、私が宮と情事を重ねても黙認して下さいでもいいはずだと

柏木は思い、かつ願っているのではないだろうか。この解釈でもって、若菜巻冒頭からの、柏木の言動すべては整合性を持つことが出来るのだと思う^(注14)……と考えることも可能であるから、そうなれば続く^⑥「しかるべき申し開き」は源氏がこの事態を正確に知ること、^⑦「この咎めを許される」とは密かな情事の止むを得なかつたことを認めてもらうことになり、細な説明なしに柏木の言葉だけで当事者の源氏の君には了解できると思つたことに無理はない。

以上綿密な物語の展開により作者が「柏木」事件を通して伝えなかつたことは、人間が自分を囲繞する世界を時空に亘つて全体像として理解しようとする時どうしても推理・想像力を必要とするが、この能力は行き過ぎると夢想となり更に妄想となつて現実の真相を越えてしまうという、理性の働きのものに内在する苦悩の原因「無明」の姿を自覚せよということであつたと考えられる。柏木衛門督は観念的存在者で現実の生活に於て明らかに光源氏・女三の宮の心を傷つけながら其の事に対して思い至らず、最期まで相手からの「あはれ」の情を期待していたのである。

三 夕霧の大将 —— 人となり ——

柏木の親友夕霧は六条院光源氏の嫡男である。源氏の実子は父の桐壺帝の中宮藤壺との間に誕生し後に冷泉帝になられた皇子と、正妻の左大臣家の姫君葵上との間に儲けた此の夕霧と、明石御方との間の姫君の三人である。それぞれ、帝・大臣・中宮と王朝最高の地位に就かれたが、冷泉帝は表向きあくまでも桐壺帝の第十皇子であ

り、後に六条院で女三宮のお生みした男子は世間体源氏の次男とされるが柏木の遺子であるから、真正正銘の源氏の跡継ぎは夕霧の大将一人である。

夕霧の誕生直後に母親葵上は産褥で亡くなったので、夕霧は元服までの幼児期を左大臣家の祖母の許で過している。この方は桐壺帝の妹君で人柄・教養の申し分の無い良い大宮^{おみ}で、最愛の一人娘の忘れ形見の夕霧を心をこめて見守つて下さつた。——夕霧も(紫上も)幼時から母親不在の子供であるが、このように穏やかで素直で明るい性格に育つた若者の背後に人間味豊かな祖母が存在していることを作者紫式部は筆を惜しまず描き出している——元服を期に、父親光源氏はこの一人息子を膝下に引き取り、立派な跡取りとすべく計画を立て教育を始めた。夕霧十二歳、加冠の儀は祖母の居る藤原太政大臣の邸で盛大に行なわれたもの、父親の許に迎えられるから、ひとり花散里の住む東院の東の対を与えられて「身分の高い家に生まれた者が、官職位階思いの儘で、世の栄華、贅沢におごる癖がついてしまうと、今更、学問などで苦労する必要はないと思うようになり、遊び事や音楽を好み、人からもてはやされたりするが、晩年になって助けていた者達が居無くなると世間は冷めたく軽蔑するものだ^(注15)」という考えから、当時の高級貴族の子弟などめつたに行かない大学寮に入学させられて、①漢学の学問をしつかり学び、心の基盤を養い将来国家の重鎮になり得る修養を積むこと ②将来人の上に立つた時手足となる筈の実務を司る者達と今から起居を共にして仲間造りの準備をすること の為に勉学に明け暮れの厳しい生活を命ぜられた。

父親の光源氏は同じ十二歳で元服したがその夜葵上と結婚し、位

階の程は記されていないが後宮の淑景舎を宿直所としたとあるから殿上人として扱われたことになる。この様に男子の元服は成人した証に社会的地位を与えられ結婚(性の解放)を許されるのが常であった。ところが、夕霧は元服して思いもかけぬ六位とされ、この六位の地下人の着る浅みどり(葱色)の衣を恥じ外にも行けぬ思いをし、更に、大宮の許で共に育てられ幼馴染から自然の恋情を抱き合った中君雲居雁との間を無理解な姫の父親に裂かれ、姫の乳母・女房達からは葱色の衣と貶されて面目を失うのである。夕霧の傷心を慰める祖母宮の優しい言葉掛けがあったと言うもの、源氏の男子教育法は常に現実の矢面に立たせて判断を促す厳しい経験主義であったから、この若者は①世間の常識的な考えの中で身を処すことと、②自分の眼で見た現実こそ唯一の頼り所であるという信念の持主に成長して行った。更に、六条院の生活の中で夕霧は父親の生き方を観察し批判する眼も養う事ができた——醜女花散里を妻としているのは女は容貌よりも人柄の良さが大切なのか。玉鬘と父親の接し方は許せない。紫上のような美しさがこの世にも在るのだ 等々と——

従って、柏木が女三宮に心を奪われたあの蹴鞠の夕、肩を並べて階段に坐っていた夕霧は透き見された女三宮の幼さにははらし咳払いして気付かせたりもしている。この時の女三宮に対する夕霧の印象は

かかればこそ世のおほえのほどよりは、うちうちの御心ざしぬるきやうにはありけれ、と思ひ合はせて、なほ内外の用意多からず、いはけなきは、らうたきやうなれど、うしろめたきやうなりや、と思ひおとさる。(注16)

と鋭く女三宮の欠点を突いているが、物語を通読している読者から見て、これは女三宮の実像を誤たず捉えていると感心する。

四 「夕霧」巻の主題——常識の人の限界——

夕霧は光源氏の身近な存在として、物語の随所に登場し、様々のエピソードが語られているが、恋人雲居雁を一筋に思い六年後に結婚に漕ぎ着けた忍耐強さ、激しい台風の中を降りしきる雨に打たれながら三条の大宮御殿と六条院の方々の御殿を野分見舞に駆け廻る実直さ、明石姫君の御機嫌伺いをする優しさ等々、世間の人々から

まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将(注17)

と言われるのも当然と思える程の理想的な御曹子に成長した。

親友柏木から女二宮の後事を託された夕霧は、まめ人の名に恥じず心をこめて御悔やみと配慮に女二宮の住む一条殿を度々叩問する。秋の或夜、夕霧は女二宮の母御息所から雅びやかな対応を受けた。秋の夜の情趣に誘われて、女二宮は亡き柏木遺愛の和琴を前にしていたが、夕霧の琵琶の音にそそのかされて箏の琴で慎ましく合奏した。曲は柏木への追慕の気持から「想夫恋」であった。夕霧の心は同情から恋心へと次第に傾いてゆく。

「夕霧」巻は、まめ人夕霧の恋心が相手方に伝わらず、策を奔する程に滑稽となり、真情は益々煙たがられ拒否され、挙げ句の果には、姫君を心配する母御息所が加持の律師の誤解による進言に心痛のあ

まり病が重くなり絶命し、この母の死の原因を夕霧の所為とする女二宮のかたくな態度に業を煮やして強引な結着を画したところで、漸く女二宮も諦め悲しみながら受入れたという、本来なら人を愛するという悦ばしい行為が、その行為の及ぶ所で何とも白けた人騒がせなことになる一連の事件を展開している。物語が優雅な文体に戴せられて静やかに語られているので、内容と言葉のちぐはぐな感じが、又、苦笑いを誘う。

次に二三の場面を考慮して、作者の意向を質してみよう。

御息所がものけにわずらって、加持祈祷の為、小野の山荘に行かれた時、夕霧はさりげなく振舞いながら、律師に従う僧たちの布施や浄衣など細々したものなど用意なされた。やがて、仲秋の候、野辺の風情も深まる頃、お見舞いに行かれ、そのま、一晩過したところ、

いとど人少なにて、宮はながめたまへり。しめやかにて、思ふこともうち出でつべきをりかな、と思ひゐたまへるに、霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば「まかでむかたも見えずなりゆくは、いかがすべき」とて、

山里のあはれを添ふる夕霧に立ち出てむそらもなきこちしてと聞こえたまへば

山賤の籬をこめて立つ霧も心そらなる人はとどめず

ほのかに聞こゆる御けはひになぐさめつつ、まことに帰るさ忘れ果てぬ。

当時の社交的贈答歌の常識として、贈歌が「留まりたい」と言えば、答歌は「留めず」と言うのは当然である。「そらもなきこち」に應じて「心そらなる人」の語が使われたのも常套である。女二宮はまさに儀礼的、形式的に應對した。それを真面目人間夕霧は「心そらなる人は留めず」ならば「自分のように心から慕っている人は留まってよいのだな」と解して、さりげなく居続けてしまう。勿論供人を召して律師に用事があるからここに留ることを告げ、家来達を近くの荘園で休ませることを命ずる配慮は忘れない。そして、更にさりげなく女房のあとについて女二宮の部屋に入ってしまった。馴れ馴れしく近づかれて皇女の誇りを傷つけられ驚き悔む女二宮に、

いと心憂く、若々しき御さまかな。人知れぬ心にあまりぬるすきずきしき罪ばかりこそはべらめ、これより馴れ過ぎたることは、さらに御心ゆるされでは御覽ぜられじ。

と説得する夕霧である。人知れず慕って来た気持を押えかねてこのような行動をとりましたが「過ち」というほどのことはないでしょう。これ以上の馴れ馴れしい振舞いはお許しがなくては致しませんと言う。真面目人間は思ったことを言葉に出し、言葉にしたことは実行する自信があるのである。しかし、一寸想像を働かせば、世間の人は二人の仲を疑うこと必定で宮の迷惑の尋常でないことが思いやられる筈である。更に宮を困らせたのは、思い詫びて

われのみや憂き世を知れるためしにて

濡れそふ袖の名をくたすべき

(私だけが夫に先立たれた不幸な女の例として悲しんでいるのに更にあなたのことで不名誉な恥をさらし涙で袖を朽たさなくてはならないのか)

とふと口ずさまれたのを耳にした夕霧が

おほかたはわれ濡衣を着せずとも朽ちにし袖の名やは隠るる

(大体、私があらぬ噂を立てるようなことをしなくても、あなたはもう世間から悪い評判を立てられて——夫に先立たれたという汚名

——隠しようもないではないか)

「ひたぶるにおぼしなりねかし」^(注18) (今更、何もかもお捨てなさい)

と単刀直入に言い寄ったことである。夕霧の論理はひどく常識的で未亡人になってしまった以上、生活の世話をしようとする真面目に申し出た男性に従うのは当然であろうというのである。

それでも彼は「御ゆしあらでは、さらにさらに」と苦しい自己抑制に徹しておとなしく帰って行った。

ところで女二宮が夕霧を急ぎ立てて帰した時の心境は次のような「苦惱」の状況であった。

(柏木)

かれは、位などもまだ及ばざりけるほどながら、誰も誰も御ゆるしありけるに、^④おのずからもてなされて見馴れたまひにしを、それだにいとめざましき心のなりにしさま、ましてかうあるまじきことに、よそに聞くあたりになににあらず、大殿などの聞き思ひ

たまはむことよ、なべての世のそしりをばさらにもいはず、院にもいかに聞こしめし思ほされむ、など、離れぬここかしこの御心をおぼしめぐらすに、いとくちをしよう、わが心ひとつに、かう強う思ふとも、人のもの言ひいかならむ、御息所の知りたまはざらむも、罪得がましよう、かく聞きたまひて、心幼く、とおぼしたまはむもわびしければ……^(注19)

① 亡夫柏木は位もまだ低かったのに、どなたも賛成だった。
② そこで結婚したのに夫は世間体を重んじるだけで冷めたかった。

③ この度の夕霧は身内の者で——柏木の異母妹雲居雁は夕霧の北の方——柏木の父上はどう思うか。世間も非難するであろう。父朱雀院も情なくお思いであろう。

④ 誰もが賛成する筈の無いことだから残念だ。

⑤ 我一人が強く拒んでも噂は立ってしまうであろう。

⑥ 母上の御存知でないのも気が咎める。しかし、お聞きになったら幼稚すぎるとお叱りを受け辛い思いをすることであろう。

このように見てくると作者は「柏木—女三宮」で描いたへ一途に六条院だけを恐れる心情を意識しながら「夕霧—女二宮」の心境を敢えて形成したと考えるようになる。前者は世間体など気にしないで自分の思いを生き抜いた——女三宮ですら自分の意志で出家してしまった——が、後者は世間の常識を自ずと判断の枠組とし、その中で自己反省を重ねてゆく、^⑤「どなたも御賛成だったので成行きに身をまかせて柏木が婿として通われるのに馴染んでいった」という

言葉で表現された女二宮の内心は、言葉に表わせない不安な思いがどれ程深かったことか。皇女としての誇りを保たなくてはならず、と言って愛するという行為はどこまでも相手の為に生きることであるから自己愛を捨てて身を投げ出さなければ成り立たない。どの程度、どうしたら人並みの仲の良い間柄になれるか、一日一日と馴れるうちに良くなってゆくであろうと気を使っていたのに、夫の心は冷めたく、最後まで自分と離れていた——柏木は病を得てからずっと大殿で両親の看護を受けていた。常識ならば優しい妻に看取られなければならぬのに——女二宮はかくある筈の世間の常識に思いを合わせて、思い通りにゆかない現実^①に苦しんでいる。

夕霧が夜明に帰った姿は忍びようもなかった。御息所の信頼している律師の目に留まっていたのだ。

いと聖だち、すくすくしき律師にて、ゆくりもなく、「そよや。この大將は、いつよりここには参り通ひたまふぞ」と問ひ申したまふ。御息所「さることもはべらず。故大納言のいとよき仲にて、かたらひつけたまへる心違へじと、この年ごろ、さるべきことにつけて、いとあやしくなむかたらひものしたまふも、かくふりはへ、わづらふをとぶらひにとて立ち寄りたまへりければ、かたじけなく聞きはべりし」と聞こえたまふ。「いで、あなかたは。なにがしに隠さるべきにもあらず。今朝、後夜にまうのぼりつるに、かの西の妻戸より、うるはしき男の出でたまひつるを、霧深くて、なにがしは見えわいたてまつらざるを、この法師ばらなむ、大將殿の出でたまふなりけりと、昨夜も御車も返してとまりたまひに

けると、口々申しつる。…中略…このこと、いと切にもあらぬことなり。…中略…いと益なし。本妻強くものしたまふ。さる、時にあへる族類にて、いとやむごとなし。若君たちは、七八人になりたまひぬ。え皇女の君押したまはじ。…^(註20)

気分悪く伏せていた御息所は何も知らなかった。夕霧の来訪は、いつもの親切なお見舞だと思っていた。無骨な律師は「隠すな」と制して、「法師達も知っている、あれは夕霧の大將だ。昨日も車を返して泊ったと口々に申している」…「これは絶対に許されないことだ」…「二人にとって何の良いこともない。本妻（雲居雁）の立場が強すぎる（太政大臣の姫）から、皇女であっても押さえがきかないであろう」と法師も又常織的判断を頑迷に主張している。根拠は「いと益なし」という功利主義である。

ここまで世間に知られてしまっているのは仕方がない、夕霧の来訪を許そうかと傾きかけた御息所のもとへ、二日目の夕方、夕霧から「昨夜の女二宮の冷めたいお気持がわかりまして…」とはつきり結婚の意志を示したようでもない手紙が届いて、本人は現われなかった。夕霧にしてみれば宮に許されていないのだから、今晚通つたら相手に迷惑であろうと遠慮したのだが、へ女君の許に通い始めた男は三晩通い続けて結婚の誠意を表わす常識に捕らわれている御息所は夕霧の行為に心を痛め

女郎花しをるる野辺をいづことて^①一夜ばかりの宿を借りけむ

と不実を詰る手紙を書きさしのみ、捻り文で送って来た。この手紙を夕霧が読もうとした時、女二宮からのものと誤解した雲居雁によつて奪われ忘れられ翌夕まで夕霧の手に戻らなかつた。漸く手にした夕霧は昨夜のことを特別の行為と思込まれ思い余つてこんな手紙を書かれた御息所の心情を思いやつて、今更取返しのかぬことをしたと悔やむ心でいっぱいになる。御息所の歌の意味は表向きは「^①一晩だけお泊りになるのは失礼です」と浮気を詰っているが、

秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花今宵ばかりの宿も貸さなむ(貫之)を敷歌にしているのは明らかなので、そうすると夕霧の行為を許し女二宮を宜しく頼むという意味を裏に籠めていることになる。御息所は、噂が立つてしまった以上きちんと形を調えた方がよいと考え、又、自分の亡くなった後の宮の心細さを思うと夕霧に托すほかないと思われたのであろう。夕霧のお詫びの手紙が届いたのを、苦しい意識の下に(手紙が来たということ)は御本人は今晩も来ないのだと思いつつ御息所は絶命されたと物語りは続いてゆく。

こうして見ると「夕霧」巻は、主人公夕霧が目に見える確かな現実の世界に身も心も適合して生きていくだけでなく、この巻全体の世界が夕霧と同質の世界で動いているように作者が意図的に物語を展開していると考えることができる。人は現実の環境に捉われ、流されて日々を暮してゆくとはいえ、それだけでは、自分は何の為に生きているのかわからなくなり、何故そのように生きるのかを問うことすら忘れた「無明」の状態に在り続けるなら「生きて有ることの真の悦び」を心に得ることも不可能になるということであろう。

「夕霧」の恋心を受け付けけない女二宮は御息所が亡くなった後ますます頑固に遠ざけていらしたが、夕霧の方は心をこめた手紙を

度々送り、それ以上に御息所の葬儀以来物質的援助を惜しみなく行い続けた。物質的援助は身内でもない夕霧の為すべきことではなかつたが、夕霧の気持は好意を形ある物で表わすことで相手に伝えることができる筈だという信念に支えられているのである。いつまでも女二宮に受入れられぬ夕霧は四十九日の果てに、そのまま小野の里に隠居したいと思つている女二宮を強引に一条の御殿に戻られるよう画策し、その為に邸内を美しく模様替えし——それもいちいち

磨きたるやうにしつらひなして、御心づかひなど、あるべき作法
めでたう、壁代、御屏風、御几帳、御座などまでおぼし寄りつ(注2)

とその物を具体的に挙げて物・形への拘りを示すような文章表現を作者は使っている——そして、当日には邸の主のようにお迎えしてその儘住みつき顔で居続ける。事情を知る者は驚いたが、世間一般は前々からこうであつたのだと了解し、女二宮が御承知なさつていないなど思い寄る者がいなかったのでお気の毒でした、と断り書きまで作者は付けている。

常識を固定的に形式化し、形式で雁字搦めにして相手を自分の思うように動かしてみたものの、二人の間になつかしい心の交流が始つたとは考えられない。いつか相手の心が開くのを期待し、やがて倦んで破綻をきたすであろう。滑稽なことに、本妻の雲居雁とも穏やかに暮す方法として物語は

(六条院の)丑寅の町に、かの一条の宮(女二宮)をわたしたてまつりてなむ、三条殿(雲居雁)と、夜ごと十五日づつ、うるは

しう通ひ住みたまひける^(注22)

と、愛情を数値で割切つて解決している夕霧の姿を垣間見せている。

おわりに

以上、対称的に苦の状況を露呈した柏木・夕霧二人の王朝の若者の在り様^{ようさま}を考察したが、原文を読み続けているうちに、この二人の若者が千年前の王朝人であったことを全く忘れてしまう程、二十世紀末の現代の日本社会の青年を寸分たがわず描き出しているように恐しくなった。平和で豊かな生活が当り前となり、次第に無自覚無気力になって、身近かな満足感だけに支えられた心。抽象的なペーパー教養、しかも学歴社会に怯えて、学校での勉強もテストの正解のみに拘る心。そんな小さな片寄った心の持主では、本来、もっともっと広く深く生命と文化の根源から生きることのできる人間にどうして成長することができようか。自分の姿は自分には容易に見えてこないものであるから、まざまざと物語られた二人の若者の姿を——有難いことに、この柏木・夕霧は平和で豊かで恵まれた王朝の青年像である——己の似姿として反省の手引きにしたいものである。『源氏物語』の作者紫式部も当代の若者の姿をもって、お若い中宮彰子様^{あきみさま}の心の教育を意図したものと考えられる。

— 以上 —

- 注1 新潮日本古典集成二卷「賢木」一八二頁(以後巻数のみ)
 注2 三卷「滯標」一五頁
 注3 四卷「胡蝶」四二頁
 注4 五卷「若菜上」二九頁
 注5 五卷「若菜上」一三〇頁
 注6 五卷「若菜下」一九九頁
 注7 五卷「若菜下」二〇四頁
 注8 五卷「若菜下」二五八頁
 注9 五卷「柏木」二六七頁
 注10 「源氏物語玉の小櫛」本居宣長全集二一九頁
 注11 「源氏物語の世界」第七集一九頁「柏木の生と死」秋山虔
 注12 五卷「柏木」二九二頁
 注13 五卷「柏木」二九四頁
 注14 「源氏物語の世界」第七集 八二頁
 注15 三卷「少女」二二二頁
 注16 五卷「若菜上」一三〇頁
 注17 六卷「夕霧」一一頁
 注18 六卷「夕霧」二四頁
 注19 六卷「夕霧」二五頁
 注20 六卷「夕霧」三二頁
 注21 六卷「夕霧」七二頁
 注22 六卷「匂兵部卿」一六四頁